

乗雲

寺報

第114号

1985年4月創刊

R3.8.1 発行

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560

編集人
広厳寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

心田(しんでん)を耕す

仏教では、教えに学ぶことを「心田を耕す」と言います。様々な状況によって荒れがちな心の田を、仏さまの教えを範とし常に耕すことが大切です。

雑阿含経(ぞうあこんきょう)にあるお話です。お釈迦さまはいつものように弟子を連れて托鉢を行っていました。あるとき、一軒の家の前で男がお釈迦さまにむかってこう言いました。「私は田を耕し、種を蒔いて食を得ている。あなたも自分で田を耕し、食物を得てはどうですか」。するとお釈迦さまは「いや、私も耕し種を蒔いている」と答えられます。それを聞いて男は驚き、また尋ねました。「しかし、私はあなたが田を耕したり、種を蒔いたりしている姿を見たことがありません。牛もいない道具もないのにどうやって耕すのですか。お釈迦さまは答えられました。「私は、私の心の田

を耕しているのです」と。私たちは食べ物がないで生きていけません。毎日の生活のために田を耕し働いています。しかし、私たちに他にも耕さなければならぬものがあります。



福田衣 (十三条糞掃衣)

それは「心」です。心を耕すには鋤や鍬等の道具や、牛も必要ありません。形もない目にも見えない心ですが、いつも耕し種を蒔いて良い実りを得ること、これが何よりも大切なことではないでしょうか。今の世の中、物が豊富で快適な暮らしができ

ます。しかし反面、心の荒廃が進んでいます。それは、「心の田を耕す」ことを忘れているからに他なりません。

私も僧侶がいつも身に付けているお袈裟を「福田衣」と言っています。よく見ると田んぼの形をしています。あぜ道で区切られた大小様々な「福田、幸福の田んぼ」です。インドのお釈迦さま在世の時代、最初は「袈裟」のような僧侶たちが共通で身に付ける衣服がなく、当時のインド人と同じに大きな布を身体に巻き付けていただけでした。又、バラモンという宗教が主でありましたので、同じ服装で間違われることもしばしばでした。そこで、お釈迦さまによって考え出されたのが「袈裟」です。あるとき弟子を連れて説法の途中に、小高い山の上から眼下一面に広がる水田をご覧になり、この田の形を模した法衣を思いつきました。「心田を耕す」と言うお釈迦さまの教えは袈裟にあらわされています。檀信徒皆さまの身に付けておられる「輪袈裟」も同じものです。私たちは袈裟を着す本当の意味を理解し、いつも「心田を耕す」ことを忘れてはなりません。これがお釈迦さまの一番大切な教えです。

令和三年 年回忌表

〔回忌〕	〔没年〕
一周忌	令和二年
三回忌	平成三十一年 令和元年
七回忌	平成二十七年
十三回忌	平成二十一年
十七回忌	平成十七年
二十三回忌	平成十一年
二十七回忌	平成七年
三十三回忌	昭和六十四年 平成元年
五十回忌	昭和四十七年
百回忌	大正十一年

▼令和三年(2021)度の年回忌表です。当寺では個人情報保護の観点から本堂には張り出ししていません。正各家には昨年十一月中旬に通知していますのでご確認ください。▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせください。▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌、丸十二年目が十三回忌となる。